

経済・金融 フラッシュ

8月マネー統計 ～存在感を高める地銀

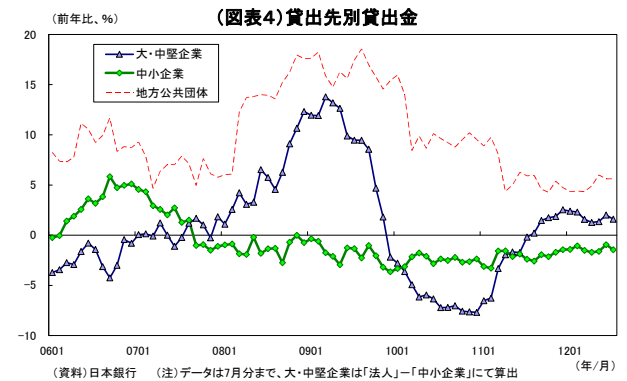
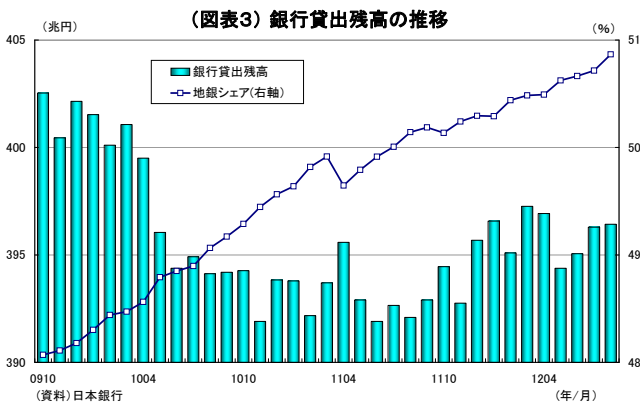
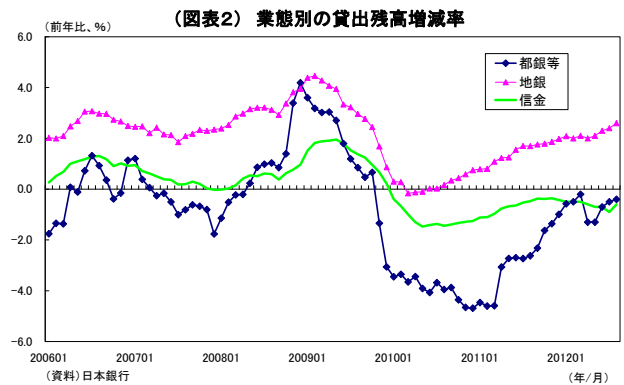
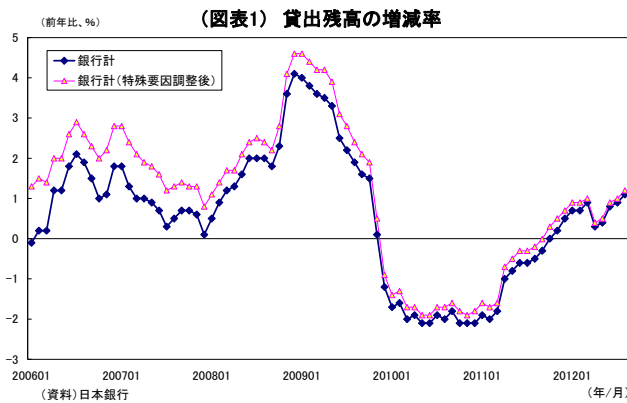
経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

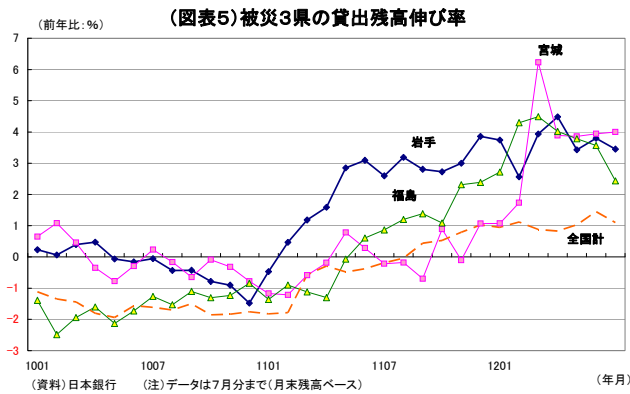
1. 貸出動向： 存在感を高める地銀

日銀が発表した8月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行貸出(平残)の前年比伸び率は 1.1%(前月改定値は同 0.9%)と4ヵ月連続で伸び率が拡大した。伸び率は 09 年 10 月以来 2 年 10 ヶ月ぶりの高い水準となる。従来同様、復興関連、電力会社向け、M&A 関連が寄与している模様。

業態別で見ると、地銀が前年比 2.6%増(前月は同 2.4%増)、都銀等が同▲0.4%(前月は同▲0.5%)。都銀も底打ちの兆しは出てきているが、増勢を強める地銀との格差は拡大している。銀行貸出残高に占める地銀のシェアは 11 年 7 月に 50%を突破した後も上昇を続け、足元では 50.9%になっている。

銀行貸出残高は、今のところ堅調を維持している。また消費増税が決まり、住宅などで駆け込み需要が出てくれば、短期的な貸出増加要因ともなる。一方で、世界経済の減速感や欧州危機緊迫化に伴う設備資金需要等の下振れリスクも全く払拭できず、楽観視出来ない状況が続く(図表 1～5)。

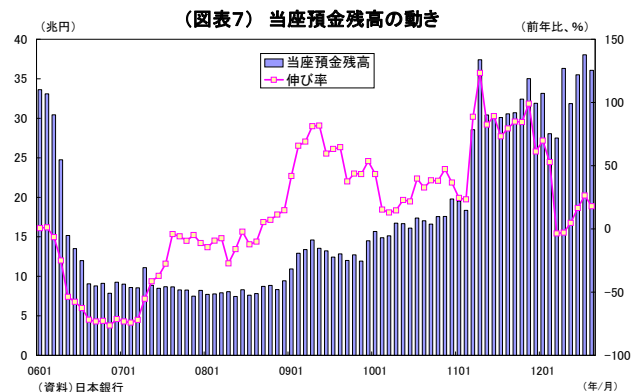
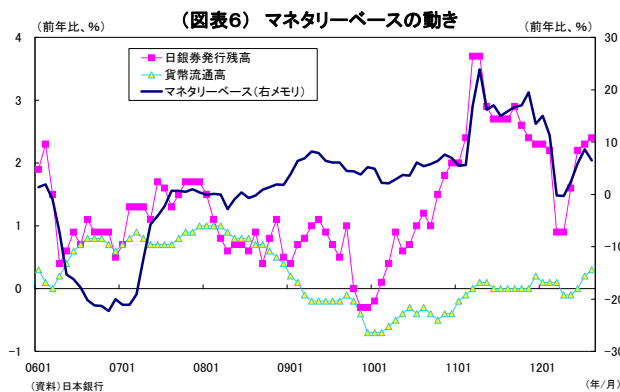




2. マネタリーベース：伸び率はやや減少

日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す8月のマネタリーベース(平残)伸び率は前年比 6.5%(前月は同 8.6%)と、4ヵ月連続の前年比プラスながら伸び率は縮小した。日銀当座預金の伸び率が前年比 18.0%(前月は同 26.4%)と縮小したためである。季節調整済み前月比年率の伸び率で見ても▲14.7%と3ヵ月ぶりの前月比マイナスに。また水準の観点でも、マネタリーベース残高(平残)が 121.5兆円、当座預金残高が 36.1兆円と、ともに依然高水準ながらも、過去最高であった7月を下回っている(図表6,7)。

日銀は資産買入れ等によって潤沢な資金供給を行っているが、資金余剰感などから資金供給オペの札割れが収まらず、積み上げに苦勞している。今月は国債の大量償還が予定されており、当座預金残高の増加が見込まれるが、札割れ問題という課題に日銀がどう対処していくのかが、今後のマネタリーベースの増加ペースに影響を及ぼす。



3. マネーストック：投資信託の前年割れが続く

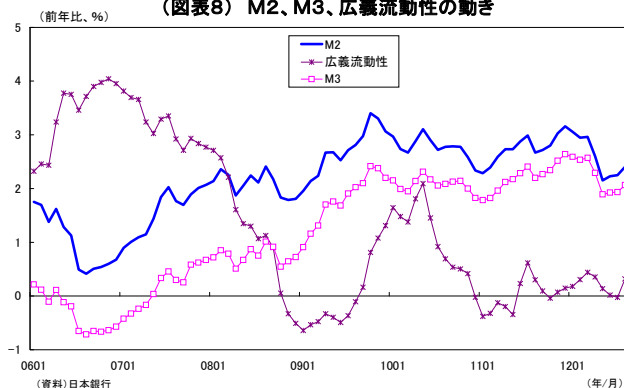
通貨供給量の代表的指標である8月のM2(現金、国内銀行などの預金)平均残高の伸び率は前年比 2.4%(前月は同 2.2%)、M3(M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む)は同 2.1%(前月は 1.9%)とともにやや伸び率が拡大。M3に投信や外債などを含めた広義流動性の伸び率も前年比 0.3%(前月改定値は同▲0.0%)と3ヵ月ぶりにプラス圏へ浮上した(図表8)。

内訳では、預金通貨（普通預金など）と現金通貨の前年比伸び率が高まっている一方、準通貨（定期預金など）の伸び率拡大は一服。前月差（季節調整済み）で見ても、預金通貨の伸びは6月以降顕著になっており、残高（季節調整済み）は3ヵ月連続で過去最高を更新中。

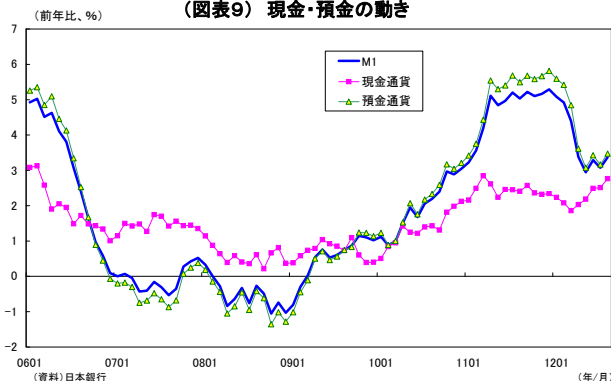
なお、投資信託（元本ベース）については前年比1.9%減（前月改定値は同1.6%減）と7ヵ月連続の前年割れが続いている（図表9～11）。

このように8月についても国内マネーの流れは総じてリスク回避的であった。同月には米景気回復期待が一旦高まったものの、中国経済の減速感や欧州債務危機への根強い警戒感などが影響したと思われる。

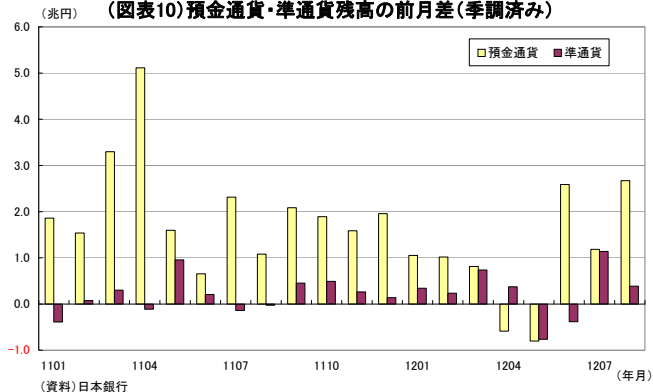
（図表8）M2、M3、広義流動性の動き



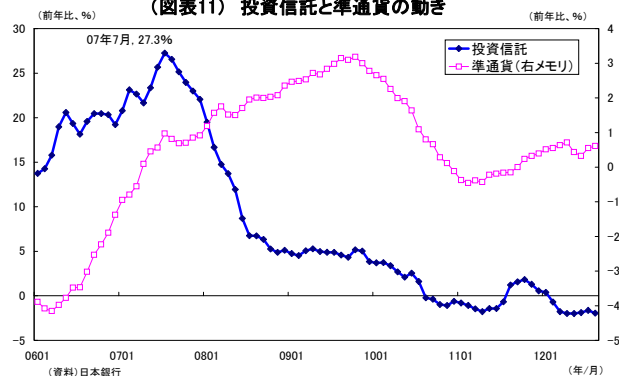
（図表9）現金・預金の動き



（図表10）預金通貨・準通貨残高の前月差(季調済み)



（図表11）投資信託と準通貨の動き



（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。